

第 80 回 歴史探訪の会「東海道と中山道の分岐点 草津宿を歩く」

日時：令和 4 年 4 月 20 日(水曜日)

場所：滋賀県・草津市

案内人：澤田謙治

コース： JR 草津駅～大路井道標～追分道標～草津宿本陣～草津宿街道交流館～(昼食・込田公園)～
常善寺～道灌蔵～立木神社～矢倉道標～野路一里塚跡～平清宗塚～JR 南草津駅

コロナ感染症”第6波“の影響を受けて、今年 1 月に予定していた月例会は中止となり、元々3月に予定していた今回の例会も 1 ヶ月延期して、昨年 11 月以来 5 ヶ月ぶりに開催した例会となった。歩くと汗ばむ陽気の天候のもと17名が参加、草津観光ボランティアガイド協会のガイドさん2人の案内で旧東海道に残る草津宿の史跡を訪ねました。

草津は古くから交通の要衝で、関ヶ原合戦の後に徳川家康が天下を治め、全国に街道を整備した時期に東海道の 52 番目の宿場町として誕生し、人の往来の増加とともに発展しました。江戸時代、天保年間(1830～1844 年)には本陣が 2 軒、脇本陣 2 軒、旅籠が 72 軒あった。又、中山道の出発点(終点)でもあり、現在でも JR 東海道線(琵琶湖線)米原方面、名神高速道路が旧中山道方面、JR 草津線、新名神高速道路が旧東海道方面と主要交通路の分岐点となっている。

【大路井(おちのい)道標】

江戸時代には旧草津川の南側にあった東海道と中山道の分岐点が、明治 19 年(1886 年)の旧草津川隧道の完成とともに東海道も一新され、分岐点が旧草津川の北側、覚善寺の南西角に移り、新しい分岐点に大路井道標が建てられた。現在は覚善寺の門前に移築されています。尚、道標には「左中仙道」と書かれています。「中仙道」か、それとも「中山道」か？ 江戸時代には「中仙道」とされていたのが、明治時代になって「中山道」という字が使われるようになったと言われています。



【追分道標】

「追分」とは道の分れるところを意味し、元々(明治 19 年以前)の東海道と中山道との分岐点に道標が建てられていました。道標には「右東海道いせみち 左中仙道美のち」と刻まれ、道標が建つこの地は東海道と中山道のまさに分岐・合流地点でした。江戸時代に街道が整備される以前、この地は伊勢神宮や美濃(現在の岐阜県)への中継地として栄えた事がうかがえます。又、街道を往来する諸国定飛脚から寄進された火袋付きの常夜灯が今も残されています。



追分道標



旧東海道

【草津宿本陣】

「本陣」とは元々戦いの際に総大将がいる場所(本営)の事。戦の際の指令所だった「本陣」が休息や宿泊の場所という意味で使われたのは室町幕府第二代将軍・足利義詮が上洛の際に宿泊した場所を「本陣」と呼んだ事が起源と言われています。

江戸時代の「本陣」は大名、幕府の役人、公家など限られた人達だけが利用できる施設で、殆どの宿場町に1軒から数件置かれ、幕府から「本陣職」を拝命した家によって運営されていたが、明治3年(1870年)には本陣が廃止となった。

草津宿には「田中七左衛門本陣」と「田中九蔵本陣」の2軒の本陣があったとされ、現存するのは「田中七左衛門本陣」で、材木商も営んでいたことより別名「木屋本陣」とも呼ばれ、田中九蔵本陣と区別されていた。この「田中七左衛門本陣」は現存する本陣としては最大の規模のもので国の史跡にされています。残された「大福帳」(現在で言えば宿泊カード)には以下のような歴史上の”有名人“の名前がみられます。

- ・浅野内匠頭
- ・吉良上野介
- ・土方歳三他新選組隊士
- ・皇女和宮 (徳川家茂に嫁ぐ途中に立ち寄り、昼食を摂った)
- ・シーボルト

残されている絵図面によると、建坪 468 坪(約 1,500 m²)、部屋数が 30 余室で 268.5 畳。向かって右側が本陣職の住居棟、左側が宿泊者用座敷棟になっている。玄関の先には長い畳廊下があり、その両側に従者の部屋、最も奥に主客の部屋があります。



草津宿本陣



本陣内の畳廊下

【常善寺】

天平時代に良弁僧正が華嚴宗の寺院として創建されたと伝えられ、草津では最古の寺院とされています。かつては 3,499 坪の寺領を持つ程の大寺院だったがその後衰退、昭和 43 年に現在の鉄筋コンクリートの本堂が落慶された。本尊の阿弥陀如来坐像、並びに観音菩薩立像、勢至菩薩立像は鎌倉時代建長5年(1253)に製作されたもので保存状態が良く意匠に優れ大変貴重な事から国の重要文化財に指定されています。又、作風が快慶のものと類似しているが、造られた年代から快慶の弟子の作ではないかと言われています。

草津は古くから交通の要衝だった事から為政者から重要視され、元弘3年(1333)には足利尊氏が戦勝を祈願し、室町時代には足利将軍家が宿所として利用、延徳年間(1489～1492年)には足利義尚が居館を境内に移し「草津御所」と呼ばれました。又、慶長5年(1600年)の関ヶ原の合戦で勝利した徳川家康が常善寺を本陣として利用したと言われています。



阿弥陀如来坐像



現在の常善寺

【道灌蔵・太田酒造】

江戸城を築いた事で有名な太田道灌の末裔が営む酒蔵。現在の当主は道灌から数えて 18 代目にあたる。

大田道灌から五代目の子孫になる太田資武が越前藩主・結城秀康(徳川家康の子)に仕え、家老職を務めていたが、資武の子、太田正長が幕府の命を受けて草津に移住、表向きは貫目改所、人馬継立所をしながら、“かくし目付”として街道を行き来する人々を見張る役目をしていました。

明治時代になり地元の米を使って酒造りを始めて今日まで続いています。

貫目改所： 幕府が街道を往来する荷物の重量を検査する役所

人馬継立所： 荷物を運ぶ為の人足や馬を交換したり、補充したりする所



【立木神社】

創建は称徳天皇の時代である神護景雲元年(767年)、ご祭神は武甕槌命(たけみかづちのみこと)。

武甕槌命が常陸国の鹿島神宮より白鹿に乗って大和国春日神社(現在の春日大社)への勧請の旅の途中、当地に到着した。武甕槌命は持っていた柿の鞭を地面に刺して、「この木が生え付くならば吾永く大和国三笠の山に鎮まらん」と言うと、柿の木が生成した。それを見た里人はこの木を崇めて社殿を建立し、武甕槌命を祀り、社名を立木神社と称したのが始まりとされています。春日大社とは兄弟の関係となるが、春日大社の創建は神護慶雲2年(768年)となっており、立木神社が兄と言えます。



延暦20年(801年)、征夷大將軍の坂上田村麻呂が蝦夷征討に出陣した際当社に立ち寄り、道中安全と厄除開運を祈願し、大般若経一部を寄進している。境内にはご神木の柿の木があり、又、滋賀県内に残る最古の道標があります。

【野路一里塚跡】

「一里塚」とは、街道の一里(約4km)毎に両脇に塚(土盛)を築いてその上に松等を植え、旅の旅程の目安として造られたもので、「野路一里塚」は東海道「江戸日本橋」から119番目の一里塚になります。

旧東海道が現在の国道一号線と交差していて旧東海道の面影はこの付近ではなくなっており、一里塚も1881年(明治14年)の国道の整備の際にはなくなりましたが、この近辺にあったようです。

【矢倉道標 “急がばまわれ” 発祥の場所】

草津から京都に向かうのに、東海道を歩いて大津に向かうか、矢橋街道を經由して矢橋の渡し場から船を使って大津に向かう2つのルートがありました。東海道と矢橋街道との分岐点に1798年(寛政10年)に建てられたのが矢倉道標です。かつてはここに「姥ヶ餅屋」があり、歌川広重が描いた浮世絵や、「東海道名所図会」、「伊勢参宮名所図会」などに描かれています。

「急がばまわれ」という言葉は、ここで東海道を行くか、矢橋の渡し場から船を利用するか、を思案した事からでた言葉と云われています。船を利用する方が早いですが、天候の影響を受けやすい船よりも、まわり道になっても着実に瀬田橋から大津に向かう東海道を歩くのがよい、という事から生まれた言葉のようです。

【清宗塚】

平清宗は平宗盛の長男で、平清盛の孫にあたる。平家滅亡の戦いとなった壇ノ浦の合戦で、父宗盛と共に入水するも、源氏方に捕らえられ源義経によって父子共に鎌倉に送られた。鎌倉で源頼朝と対面の後、京都に送られる途中、父の宗盛は近江国篠原宿(現在の滋賀県野洲市)にて処刑された。清宗も近江国野路(現在の滋賀県草津市)で処刑され、その場所に五輪塔が残されています。享年17歳でした。

現在は個人所有の敷地内にあり五輪塔を見る事は出来ません。



JR 草津駅前広場にて

写真は上西さん、岸場さんが撮られたものを使用させて頂きました。